

Li-tweet 二月号

目次

巻頭詩

繭たちのさざめき 崎本智 (6) 3

特集 二・一四恋愛事変

ストレインデイズ うさぎ 6

行くな! ガーゴン 常磐誠 22

雷の内部 る 32

其のX。真央。初恋地獄篇 小野寺那仁 35

横を向いたまま 日居月諸 46

自由創作

浜辺の童 しろくま 58

魚人岬 芦尾カツヤ 61

帰省 とーい 63

ランナーたち 安部孝作 69

黒牛の絵画 安部孝作 76

今月のレビュー とーい 80

立ち食いそばのラーメン 芦尾カツヤ 81

必読! ネット文藝 安部孝作 82

ガン・ガン・ガン 小野寺那仁 85

『タイム』嶽本野ばら 崎本智 (6) 87

朝靄の食感 87

編集後記 88

記録 89

今月のコーナー

とーい

立ち食いそば屋のラーメン

最近では立ち食いそばでも普通のおそば屋に負けないお店が多いけれど、個人的には醤油の効いた、昔ながらの真っ黒で安っぽい味のもの的心底うまい、とおもっ。

10年ほど前、神奈川県の大船駅構内で食べた立ち食いそばはつゆの色、塩っ辛さも申し分なく、朝、通学途中に寄り道し、急いですすったのが忘れられない。近年、食べる機会に恵まれたものの往時の塩っ辛さを感じなかったのは、年をとった自分が濃い味を好むようになったせいだろうか。

ここ数年よく通ったのは銀座の場外馬券場近くの「みちのくそば」。のれんの向こうはカウンターという昔ながらの立ち食いそば屋で、注文すると竹のひしゃくであたたか

ブックレビューからお菓子まで！
好きなものをなんでも語ってしまおうというコーナー。

なつゆを井にそそぐ光景が時代劇に出てくるそばの屋台を思い起こさせた。

甘ったるくない濃い目のつゆには飲み干したくなるだけの誘惑があったけれど、もはや幻の味となって久しい。2011年の9月に閉店し、跡地は宝くじ売り場になった。日常によるこびを提供する店から、夢を売るお店へと変わったのは銀座という土地柄のせいかと、これを書きながらふとおもった。

いま通っているのは、有楽町のガード下にある「新角」。うなぎの寝床みたいな店内に傾きかけたカウンターと、こちらも雰囲気満点である。余談だが、東京国際フォーラム、丸の内オフィス街が近いのに、いまだ女性客を幸か不幸か見たことがない。

ここのおすすめが、ラーメンである。お店の名誉のためにいうと、そばを食べてみようかなと店へ行って、せっかくなからラーメンを食べなければ、と誤ってしまうから食べたことがないだけで、それほど新角のラーメンは旨い。現に、世の立ち食いそば喰いや

ラーメン好き、はたまた4級グルメファンをも魅了し、朝早くから夜遅くまでラーメンをすすむひとが後を絶たない。

新角のラーメンは、どうしてここまでひとを惹きつけるのか。

390円という安さもあるだろうが、理屈はいらない。下品なほどに旨い、それだけである。旨いというより、んまい、だ。

小さなチャーシューに海苔、ネギ、わかめと見た目は普通のしょうゆラーメンだが、スープを一口すすれば、押し寄せる旨さに脳と舌がよろこびで麻痺してくる。今日も「新角」でラーメンを食べてよかった、と感謝せずにはいられない。続けざまに、少し柔らかい目にゆでられたモチモチの麺をすすれば、ラーメンはこうでなくちゃ、と思うこと必死である。

「新角」のラーメンには、いまのラーメンが忘れた大切ななにかが残っている。(了)

必読！ネット文藝

『お前ら、月がすごく綺麗だぞ』

(ラジィ・ニーヴンの傑作短編『無常の月』を

2008のスレッド風味に)

<http://drupalare.jp/node/2238#comment-386>

(2008年11月11日)

RPGライター 銅大氏あかがねだいによる

SF小説のオマージュ

「2008風小説じゃねーか」と拒絶反応を示す人も多いだろうが、騙されたと思って読んで欲しい一作。

2008年11月13日、満月の夜、突如として月明かりが強くなった。深夜露時を回ったころ、巨大掲示板「ちゃんねる」の1つのスレッドが立てられる。

——お前ら、月がすごく綺麗だぞ——

「ちゃんねるの住人たちは、「俺も見た」「すげ

え」月光条列みたいじゃねーか」と、いつものノリ

で*レスをうていくが……。

スレッドは0時11分に始まり、1時を回ったあたりで終わる。ちゃんねるのスレッドは通常、最初の書き込みを含めて千のコメントがつくとスレッドが終了する。この作品は、千のコメントのうち33だけ取り出した形になっており、いわゆる「2008まとめサイト」の体裁をとっている。

コメント番号や書き込み時間などを見ると、前半ではゆっくりとしたペースで進んでいた書き込みが、後半にいくにつれて早くなっていることが分かる。コメントの345と511の間で経過した時間は1分にも満たない。345から511の間の、わずか42秒の間に書き込まれた165のレスは、作中では書かれていない。この間にはどんな書き込みがあったのか、このスレッドを埋めた人々は、何を思ってディスプレイに向かっていったのか。

原作はSFの巨匠ラジィ・ニーヴンによる、文庫本47ページの短編小説。一九七一年に書かれたアメリカのSFの傑作が、現代日本と融合し、ネットの世界に奇妙なリアルを生み出した。

なお、過去の気象情報によると、2008年11月13日は満月で、全国的に快晴であった。この日、あなたの目に映った月は、どんな輝きを見せていただろうか。

*2008風小説：ちゃんねるのスレッド風に仕立て

られた物語。『電車男』のように、スレッドの住人たちのやりとりによって物語が進行していく。『電車男』は、実際に多くの人によって書き込まれたスレッドを書籍化したものだが、2008風小説は、作者が「もしこういうスレッドが立ったら」という設定で、様々な人間からのレスポンスを一人書き分けて進行する。2008風小説は、イラスト投稿サイトdixyで「小説投稿」が始まった2001年頃から増え始めるが、本作が書かれた2008年当時はまだあまり見られなかった。

なお、ちゃんねるのスレッドの書籍化といった動きは、『電車男』が2004年10月、『ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない』が2008年6月。現在の2008風小説の源流と見られる「もし2008の世界に2008があったら」というスレッドがちゃんねる内に立ち始めたのが2008年頃である。(参照:dixy辞典)

*スレッド：インターネット上の掲示板に立てられた、特定の話題などを話す1つの枠のこと。略称は「スレ」。

*レス：レスポンスの略。スレッド内に書かれたコメントの1つ1つを指す。

*住人：インターネット上の特定の掲示板に常駐している人を、このように呼ぶ。ネットスラングの一種。

*月光条列：藤田和郎による漫画。作中に、青い光を放つ巨大な月の描写がある。

*2008まとめサイト：ちゃんねるのスレッドを特定のテーマに沿って収集・編集しているサイト。通常、掲載されるスレッドはサイトの管理人によって編集され、要点のみが掲載される。

ガン・ガン・ガン

安部孝作

第一回レビュアー Gang Gang Dance [Eye Contact]

Gang Gang Dance Biography

ポスト・ロック／エレクトロニカ他、サイケデリック、ゴシックロック、ノイズロックなどなど、ポップと前衛を自在に行き来する実験的な音楽創作について評価が高い。アンダーグラウンドでの活動実績が多かったが、様々なリズムとテクスチャーが渾然一体となったハイブリッド・サウンドをポップレコードに凝縮した。2008年発表の『セイント・ディンフナ』が広くメジャー・ヒットを記録。世界のインディー・ロック・ファンの知るところとなった。(中略) ニューヨークの尖鋭的な音楽集団としての存在感を印象付けている。

[出典 Wikipedia]

暗さというものの両義性、人は闇の中で戦慄と安寧を覚える。

この両義性は、タイトル[Eye Contact 通り、見つめ合う瞳の暗さと輝きを表現している。

また言葉なしでの伝達が、ベンヤミンのいう言語があくまで伝達可能性を伝達すると述べたのと逆に、非言語的な言語行為がここで行われている。

ここに赤く融けて、鬱蒼と繁茂する密林と摩天楼の隣組。ここではコミュニケーションが存在しえない。言葉が通じないわけでも意味が理解できないわけでもない。

ただ単に、不必要なのだ。暗さの中、だれもが光を求めて歩くうちに、

やがて光などなくても音声全てを伝えることに気が付く。

光は明らかにするが、それは表面的で、裏表／光陰という対立構造が拮抗する世界である。

だが音楽は、媒質を通して、媒質そのものを震わせて、内部的で、それ自体が現れる。

人は音楽に、聞こえる場所と聞こえない場所があるのを知っている。

例えば、建築に置き換えてみよう。広大なフロアに、柱を幾つか立てる。

その隙間に私たちは居住空間を得る。柱は空間を支えるためだけでなく、

空間における不在と影をつくり出す。

この柱の位置が奇妙であれば、建物は崩壊する。あるいは住めないだろうし、

影ばかりで、明るさが伴わない。影は鋭く細くなければならぬ。

そして、空間には必ずしも意味が伴わない。

ここはキッチン、ベッドルーム、トイレ、風呂場、仏間……

といった壁や仕切りによる障壁があればその空間には意味がで
きる。

しかし、眼の前には柱があるだけだ。

その空間はどこまでも切れ目なく続く。

音楽というのは、残響となっていくまでも聞こえている。

脳内に無限の地平線を拓き、何時までも何度でも再生させる。

それはMP3の普及に伴う現象ではない。音楽とは固よりそういうものなのだ。

一瞬一瞬の生成的な「なにか」が耳で知覚される時、わたしたちはそれを音楽とみなす。たとえ「なにか」が音楽以外のものであっても、耳で知覚するものは音である。

耳は塞がれない器官である。

固より聖性的な世界において、音ほど敏感な気配を齎すものがあるだろうか。

耳は常を常とし、開いたり閉じたりする口とは全く異なる。耳は無限を聞きとる。

アルバム中「∞」と銘打たれた曲が三曲ある。

そしてそれこそ、曲と曲の隙間であることを自白しながら、

音楽が絶え間ない運動であることを明らかにする。

両義性というのは、円環的な構造をもっており、

物事の本質の外縁を廻り続けている。

また、瞳も色彩の環である。

そして見詰め合うもの同士はお互いを映し合い、巡らせている。

またウロボロスの環のように表も裏もなくなる世界がある。

裏と表の消滅が引き起こすのは、現われと消滅の連続である。

一曲目[Glass Jar]における、絶え間ない輝かしい音の連続は、単一的な線ではなく、複合的な重なり合いの中で生じている。

ガラス瓶には裏と表がなく、繋がった中と外がある。

だから満たされ、反響させる存在である。

そこには境界などない。言葉やリズム音節や間は音と音を繋ぐための、

聴こえない音が鳴っている場所である。それは本質的に時間というものを表象させる。

ここに砂時計のイメージが浮かぶ。砂時計は運動によって時間を計るものではない。

砂時計は運動において時間を示している。

この曲が音像そのものによって現れているように、そこにあるものとして現前する。

私たちはもうそれを、何かを伝えるための音楽とは思わないだろう。

ただ自己へ移入してくる硝子の瓶、不可視の異物が胸に刺さって

いる感覚、

あるいは自己が閉じ込められる硝子の瓶、意味のない透明な世界へ閉じ込められる感覚、

この終局における孤独感と、音像の中で味わわれる愉悅は、まさに今、落とされようとしているガラス瓶の破局であり、中身のピンク色の砂がさらさらと舞い散る様である。

その後も東洋風な雰囲気を感じさせる旋律が続き、彼らの趣味を伺わせる。

なによりもボーカルのリズムが、祈るかのような歌声をもっているのも彼らの特徴である。

祈りとは手段ではない。祈りは届けられるものではなく、届くかも知れない思念であり、意志を上昇させる。

祈りにおいて、その中身はおのずから消えてゆき、純粋な祈りが産まれて来る。

段階的な対象をもった「願い」の充足／消滅を経て、祈りという行為自体において、祈りが達成されることとなるということだ。

それはある虚無的な本質をもってはいるが、祈りは聖なるものから聖性を感じし、

内的に聖別するもの（戦慄・恍惚といった体験の極地）を捧げ、聖なるものを存在者が立脚するその足裏（存在）となるのである。

祈りは願いを超越しており、聖なるものを眼の前とした言葉なき放心の境地である。

伝達することが実現されるのではなく、伝達する可能性が届けら

れている。

そしてその聖なるものは、眼前に広がる砂漠へ「放心状態」である。

彼らはこの曲を作成する前に砂漠へ赴いたと言う。

その時流紋の描かれた大地になにを思っただろうか。

書いては消えてしまう砂上においては、そこでは字は音声と変わりがなかった。

その巨大な砂の塊が、刻々と変幻していく様をどう見つめたのだろうか。

そこには無尽蔵の砂がありながら、存在を拒絶する。そこでは誰もなににもなれない。

砂漠を支配するものはただ力だけであり、砂は砂として砂漠を形成する力の権現である。

それがそれほどまでに軽々しく風に舞い、姿形を変えてしまう。つまり、ここにも硝子瓶のイメージが再登場する。

瓶の口を吹けば、笛の音が鳴り、可視でありながら具体性を置き去りにした虚無。

このアルバムはまさに、夜の歓楽の熱気と、夜の砂漠の冷気が混濁する世界である。

荒漠とした世界に響く無限の音楽と、その一点で星よりも暗い小さな光を囲んで、

快楽を覚える人たちの暗さが現れている。

暗さというものの両義性、その中で人は熱狂と孤独を覚える。(了)

『タイム』 嶽本野ばら

小野寺那仁

小説が風俗を描写するのを忘れて久しい気がする。嶽本野ばらは年齢不詳の「乙女のカリスマ」と称される現代風俗に明るい作家で「ロリキタ」ではファッション雑誌の彷彿とさせる語彙が散りばめられる。けれども彼はいわゆる文学にも詳しい作家で、ボルヘスや濹澤などがよく現れる。だが、古典の知識もまたファッションなのではなからうか。彼の作品は「告白」であり「現実」から離れられず、多少の誇張の域を出ていない。悪く言えば想像力の小説ではなく「私小説」の範疇に属する。ストーリーもあり人物の性格も書かれている。言ってみれば時代に逆行するような近代小説を書こうとしているのだ。彼の好むファッションや音楽はポストモダンであるかも知れないが、あるいは彼の根なし草的な発想や登場する人物もまたすぐに自殺を企てそうな脆弱性や環境の不幸を携えている。けれども彼の小説があくまでも近代小説であることに私は多少、驚

きを感じているのだ。最近では「破産」という作品が上梓されている。大麻不法所持で逮捕された事件を題材にしたのがこの「タイム」である。この題材からも彼は現実を少しアレンジしたものを書いているといえよう。

その逮捕された後の刑事とのやりとり。

「今、インターネットで検索して貰ったものをざっと読んでるんだけど、お前、本当に小説家なんだ」

「……」

「それも結構、有名なじやん。有名人がこんなことしちや、一般人よりマズいだろう。影響力つてものがあるから。どんなのを書いてるんだ？ 推理ものとか時代ものとか、いろいろあるよな」

「普通の小説です」

「普通って？ 司馬遼太郎みたいなのか」

「否、そうではなく」

「普通じゃあ、解らないよ。この資料には、三島由紀夫賞にノミネートって書いてあるけど、三島由紀夫って……あれだよな、確か、右翼で、腹切って自殺した作家だよな」

「ええ」

「お前も、そういうのか？」

僕は面倒臭くなって「はい」と応えます。

「普通」の小説は一般人なら「司馬遼太郎」なのだが、嶽本の「普通」は三島由紀夫なのだろう。ここにこの作家の自己紹介もいたものを感じる。『タイム』は大麻に対しての考えなどはほとんど語られていない。大麻所持による逮捕の経緯と留置所生活などほぼ現代の獄中記といえる。少しあらすじを書くと「私」はふとしたことからデリヘル嬢と知り合いになり樹脂大麻を吸引することになる。そのデリヘル嬢は失踪するが彼女の友人の「あい」とたまたまストリップ劇場で知り合う。あいは踊り子であるが嶽本の愛読者である。嶽本が魅かれるのはカート・コバーンの曲をバックにストリップを演じていたからであり、二人ともカートを愛し、崇拜している。長

く語り合うがこの部分は音楽評論めいている。嶽本はこの真実を権力に隠し隠べいするのに成功し保釈される。デリヘル嬢があいと知人という部分を黙っていたのだった。だが、あいには嶽本にさらに同一化するために覚醒剤に手を染めてしまう。嶽本は過去につきあつた三人の女性が自殺乃至失踪したことからあいを全力で庇いたくなるという筋である。(嶽本とはいうものの「僕」であつてこの挿話が事実であるとは思われないが)

「僕」はカートが早く死んだことを最後には否定しようとする。彼は生を望む。年老いても根なしのまま生きていくのを望むというテーマであつて、これはやはりあまりに近大小説っぽいのであるが扱っているのは現代的でもある。だが、私は彼のリアリズムを貴重にさえ思うし、いとおしくも感じるのだ。彼は、現代の安吾や太宰なのかもしれないとさえ思う。そして近代の亡霊に取り憑かれてるのは図らずも現代日本の精神構造の縮図になっているのではなからうか。

(丁)

朝靄の食感

崎本智（6）

薄黄色の生地が樹木の年輪のように幾層にも重ねられたお菓子、バームクーヘンはわたしのお気に入りの洋菓子のひとつである。わたしはあのデパートなどで販売されている小さく切り取られた個包装の上品なおいしさも勿論愛してやまないが、それ以上に魅力的なのはやはり大きな切り株のようなバームクーヘンにまるごとかぶりつく瞬間である。生地は湿度を保たなければぱさぱさになってしまうから常に冷蔵庫の中でしっとりとした感触をのこしておくためにも厳重に管理せねばならない。かぶりついた瞬間のあのしっとりとした朝靄のようなるおいに満ちた生地の感覚がなければバームクーヘン体験は魅力を半減させてしまうだろう。

子供の頃はショートケーキやチョコレートケーキが好きでバームクーヘンという存在はケーキ界のなかでもどちらかというところだと二軍に在籍するような冷たい眼で見ているところだ。生クリームやフルーツ、はたまたチョコレートの記憶さえ舌から忘却を許してしまうほどに二十代後半にさしかかったころからこの朝靄の食感のケーキが大好きでたまらない。噛めば噛むほどに重ね焼きされた弾力に歯が喜び、舌が次の味を待望していくのはまさに癖になる美味しさといって過言ではないだろう……。

わたしの願い―編集後記に変えて―

とーい (Li-tweet 二月号編集長)

ツイッター文芸部と出会ったのはいつだったろう。いつかは覚えていないが、ツイッター文芸部の初代部長であったイコさんをフォローさせていたから、すべてははじまった。

以来2年ほど、イコさんとの淡い付き合いが続く。イコさんは文学、私は好きな声優のことをつぶやき共通点はなかったが、互いにブロックせず、分かり合える小説や思いがツイートされれば、ときどきリプし合った。

だから、およそ文学、文芸と程遠い私が入部を希望した際、イコさんは驚かれたと同時に、口にされなかったが不安であったと思う。

後に不安は的中、私はすぐに幽霊部員となり、連絡すらせず部を休んでいたが、当時、イコさんからかけていただいた言葉に救われた。部に希望や要望があれば教えてほしい、活動が負担になっていないか、とイコさんは私を責めることなく心配してくださった。

Li-tweet 2月号の編集長を引き受けるにあたり、ふたつの目標を自分に課した。

ひとつは、Li-tweetを無事に発刊すること。

もうひとつは、Li-tweetの作成をきっかけにツイッター文芸部の部員がまとまること、その絆と出会いと再会のきっかけをLi-tweetが担うことであった。

ツイッター文芸部が生まれ3年、多くの出会いと別れがあった。

初代部長、イコさんが寛容の心で私に接してくださったこの場所が、文芸を愛する人たちにとって、いつまでもあたたかな場所であってほ

しい。初めて来る旅人にも、旅立つひとにも、戻ってくるひとにも、抱えきれないほどの花束を送る場所であり続けてほしい、そう願わずにはいられない。

最後に謝辞を。

創作活動のなか、表紙を作ってくださいったうさぎさん。実質的な編集長としてすべての作業にかかわってくださいった。

編集会議でのアイデアもさることながら、部員への連絡など地味なことを率先してくださったカジャさん。高い美意識、懇切丁寧な校正講座は部員のレベルをひと段階もふた段階も上げてくださった。

部のムードメーカー、小野寺さんの笑い声と細やかな心遣いも忘れられない。いつだって部の潤滑油であった。

編集部員でないツイッター文芸部のみなさんにも、多く助けられた。あらためて、感謝の気持ちを伝えたい。

そして、何よりお読みいただいたすべてのかたに、心からのありがとうを届けたい。

初代部長、イコさんが耕されたツイッター文芸部に、前号、編集長として6さんが蒔かれたLi-tweetという名の種は、いま大きく芽吹きつつある。

傍から見れば小さな一歩かも知れないが、いつまでもこの歩みが続くことを信じて。